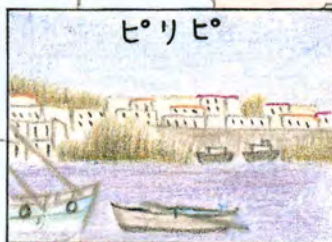
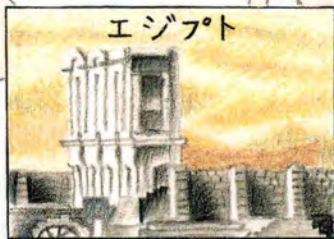


新約の集会一覽

DIRECTORY
OF
NEW TESTAMENT CHURCHES



ジョン・ヘディング
John Heading

新約の集会一覧

序文

使徒一・六、七、コロサイ一・五、六、Iコリント六・十一、マルコ十六・十五、
使徒二・四七、マタイ二八・十九、二十、使徒十九・九、十、コロサイ一・九、
十、使徒一・十四、マタイ十六・十八

一世紀の集会についての詳しい記述を見ていくと、多様性と数の多さに感銘せずにはいられない。よみがえられた主への弟子たちの質問は、彼らの心がどこに根付いていてどこに向けられているかを表わしている。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださいさるのですか」(使徒一・六)。彼らはユダヤ人であるがゆえにその視野がメシヤに対する望みに限られていた。このことに関して許されるであろう。しかし、イエス・キリストのお答えは重要なものであった。彼らの視野と異なる時代と、救い主ご自身が続けておられる宣教に彼らが関与することに目が開かれるようにする意図的なものであった。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています」(使徒一・七)。彼らはエルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、主の証人とならなければならなかった。キ

リストが彼らにもってほしかった視野、すなわちご自身がお建てになる集会の中心となるべき者たちにもってほしかった視野とは、福音を全土にもたらすことになる世界的な進展というものであった。地域集会はそれぞれ福音のうちにある救いの力を証しする核になるはずであった。

本書のリストは、一世紀にそうした集会が始まった多くの場所を編集したものである。彼らの時代に発達しつつあった通信手段を用いて、福音を伝える初期の人たちは自分たちにゆだねられた福音を、商業や文化の重要な中心地の多くのところに伝え、その結果キリストをその地の人々に紹介することができた。救いの良い知らせが未知の世界の果てにまで届けられる方法について語っている話しほど、興味深いものはない。パウロがコロサイにあてて書いたとき、「世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそうにしてあなたがたに届いたのです」と語ることができた。

「新約聖書の集会」を調べてみると、特徴がいくつかあることがわかった。いずれも読者に感銘をあたえるであろう。

一、場所と人々　さまざまな都市や町への使徒たちの訪問は、滞在期間がまちまちである。しかし、福音の伝道に費やされた滞在期間の後に回心した人々を使徒たちはいつもそ

の場所に残していったが、こうした人々が神の集会を形造っていった。こうした状況はコリントにおいて一例として見られる。コリントの地は、悪、道徳的墮落、腐敗、不品行とで有名であった。パウロは「コリントにある神の教会」（この集会を形成した者たちは「聖徒」すなわち聖なるものとされた者たちと評されている）に手紙を書き、コリントに住む人たちに心を向けて彼らのことを考えながら、次のように言うことができた。「あなたがある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです」（Ⅰコリント六・十二）。コリントの信者は異教的文化から連れ出され神の恵みにより救われたが、そのようにして神がなされたことの証人となるようにされた。集会がかつて形成された場所の多くは、今日存在していない。主イエス・キリストの御名によって集まった信者たちははるか以前に召されたが、こうした信者がしたように世界中の多くの場所で神の集会を形造る信者たちが集まっている。

二、福音伝道と集会設立　初期の集会にとって福音伝道は最も重要なことであった。彼らはまず第一によみがえられた主のご命令にしたがっていた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」（マルコ十六・十五）。網は広く打たれた。福

音を伝えた初期の人たちは「人間をとる漁師」であった。「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった」（使徒二・四七）のは、彼らの働きをとおしてであった。救われた信者（すなわち世から聖別された者）は、主の御名によって集まる者たちの集まりを形造ることになった。けれども、福音伝道はそれで終わりであったのだろうか。よみがえられた主は弟子たちに次のようにも命じられていた。「行つて、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によつてバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るようにつれ、福音伝道自体に終わりなどないことが明らかになつてくる。使徒パウロがエペソに福音を宣べ伝えたとき、伝道に应えて信じた人々に会つて喜びをもつたが、それはほんの始まりにすぎなかつた。パウロは続けた。「毎日ツラノの講堂で論じた。これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主の言葉を聞いた」（使徒十九・九、十）。救われた者たちは揺るがずにいる必要があつた。神の真理を身につけておくべきであつた。各地域において永続的なあかしが芽生えるように、パウロが諸集会にあてて書いた手紙に対する責任はこの点において明白である。コロサイの信者に対して「あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によつて、

神のみこころに関する真の知識に満たされますように。また、主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように」(コロサイ一・九、十)と書いた。よく教えられておらず、使徒の教えを身につけていない信者たちは、一世紀の初め頃に諸集會に挑戦してきた異端や誤つた教えに簡単にだまされることがよくあつた。

三、祈りと聖靈の力　今までに記された教會史というものは教會の外面的なことや目に見えるところについて非常に多く述べられがちである。歴史とは、必然的に目に見える行動や事件、出来事を描き出すものである。しかし、世人が記す聖書の歴史でさえ、実在する事件の背後にはそれを推進する力があつたことを認めている。それは多くの場合描写しがたく目に見えないものであるが、影響を及ぼすものである。「使徒の働き」を読むと、初期のあかしや建てられた諸集會の背後には、祈りの力がきわめて強く、聖靈の働きも非常に盛んであつたことがきわめて明確になつてくる。主の昇天されたのち、弟子たちが最初に聖書に登場するのは、一箇所に集まり心を合わせて祈りに専念しているところである(使徒一・十四)。そのような集まりは何度もあり、集會の内なる力とエネルギーは天からのものであると彼らは証しした。主への信頼に対する天からの応えは聖靈の満たしであつ

た。「父の約束」つまり主イエス・キリストの約束の成就とは、天から力を授けられることであつた。ペンテコステの重要な点は、すべてのものが聖霊に満たされたということである。大いなることがなされ、力ある働きが始められ、多くの者の人生が変えられたが、こうした「無学で無知な者たち」を動かした原動力を特定できるものは人の中にはだれもないであろう。唯一の説明として、彼らが聖霊に満たされていたということであつた。起こされてくる集会の多くが、比較的短時間で衰退し消滅していったのは悲しいことである。ひとたび主に信賴する心が失われ、生ける神の御霊の推し進める力がなくなつてしまふと、あとは衰退していくだけである。このことから二十世紀に生きる私たちが初期のこれらの証しを回想するとき、重大な教訓を私たちに与えてくれる。

私たちがこの本を用いるとき、次のことを覚えておこうではないか。主はあらゆる時代においてご自身の御名に対する証しを保つ御力を確實にもつておられるということ、ペテロに対する主のみことばは、みことばから離れたことや逸脱が見受けられる今日において意味をもつということである。「この岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません」(マタイ十六・十八)。

一九九二年一月 アーサー・T・シアマン

はじめに

聖書に登場する場所や男女のこと、奇蹟、たとえを詳しく載せる辞典などは、それらを聖書の中から詳細にしようとする内容が豊富になるため分厚くなってしまふ。しかし、新約聖書の諸集会辞典は聖書に名前の載っている集会の数が限られているので、当然厚さは少なくなるはずである。本書では、その大小にかかわらず集会すべてを抜き出した。ある場合明らかな記述がなくてもそこに集会があったと推論した。重要でない引用箇所について、とくに述べるものがなかったり、推論することができないときには削除してしまっている。

わずかな例外はあるが、新約の集会全般にわたってその成り立ちを長くあるいは短くまとめ上げようと試みた。地理に由来する簡潔文や歴史的なものを除き、歴史的・靈的事実である聖書からすべて取り上げ、新約の記録を選びすぐって編集してある。また、諸集会がどのように起こされ、主に仕えて発展したかを順序立てて正確に示すための配列をした。それで、本書は教義の本ではなく新約時代における開拓伝道、信仰生活、主に対する奉仕と実践についてのものである。

副題(おそらくこれが主題であろうか)として「彼らとともに働かれる主」(マルコ十六・

二十)はよいかもしれない。というのは、主ご自身がお選びになり賜物をお与えになったしもべを用いて地域集会を建てて築き上げるのは、実際に主の働きだからである。新約聖書に記された時代以降の記述は、間違いなく大小の宗派の発展を題目とした「教会史」となるであろう。これは歴史家にとって興味あることであろうが、霊的なことに心を用いるものにとつてそんな歴史は神がお与えになった新約の集会の記録と比較・対照すればまるで価値がないことを実感するであろう。

(1)神が新約の集会から数々の原理とおびただしい実践とをお示しになったこと。

(2)次世代に聖職者制度へと発展した歴史は主のみを見上げる信仰に何の導きにもならず信仰生活の基礎となることもないことを信じるものにとつて、神が新約の集会の中で働くことのみが交わりと実践の基本となる。

この書を読まれる方は心にしっかりとこの識別を身につけてほしい。

各集会について詳細に編集したことを正しく理解するために地図を絶えず参照してほしい。そうでないと多くの詳細な事柄についていくことが難しくなるかもしれない。さまざまな集会間での頻繁な行き来を特に考察する価値は確かにある。地図はこのための助けとなる。